

近世女性をめぐる書物と「女書」

安 田 千恵美

近年、女性の「知」をめぐる議論が盛んである。特に近年多くの研究成果が出されている近世の書物・出版研究の潮流に対し、女性用の教訓書の類を中心とした様々な書物の研究が進展している。

これらの書物はしばしば「女訓書」と表現されるが、その内実は多様であり、研究用語としての定義が曖昧なまま使用されているという現状がある。例えば、写本の形態から成立し後に出版されるという『唐錦』のような書も「女訓書」と称されてきたし、その初発から刊本として製作された「女大学」のような教訓型女子用往来と称される書も、その本文の性格付けにより「女訓書」と表現され、カテゴライズされてきた。

このような現状がある一方で、「女訓書」と表現できない種々の書物、例えば女筆手本や仮名草子や浮世草子にみられる女性像等の研究も進み、女性向け書物の多様性が指

史苑（第七二巻第二号）

摘されている。

本報告では、近世において夥しく出版・成立した女性向け書物の意義に着目し、「女書」概念の検討と、代表的書物の一つである「女今川」の広がりを確認し、従来「女訓書」とされる「女今川」の近世女性向け書物の多様性を指摘する。

まず、「女書」という語について検討する。これは元禄五（一六九二）年の『広益書物目録』で書物を部類分けしたうちの一つである。以後の書物目録にも部類分けされたものには「女書」の項目が見られる。「女書」がどのような書物を指すのか、については時代により変容があり詳細な検討が必要であるが、様々な志向性を含む女性向け書物の総称として使用していると見て、そう間違いではないだろう。

例えば、『江戸時代女性文庫』に所収されている女性向

近世女性をめぐる書物と「女書」(安田)

けの書物は二二六種にも及び、そのジャンルは料理・曆占・産育・遊戯など多種多様である。このような「女書」は、①作者の性別、②刊本であるか写本であるか、ひいては公開を前提として書かれたものか否か、③形式(漢文仮名・分量・ルビ・挿絵の有無)等の要素で細分化できる。女性向け書物に書かれた多くの「知」は、本来伝授者と享受者間の直接伝授であった女性の「知」が文字化されるようになった結果のものであろう。

これら「女書」を、「女訓書」と一括して扱わず、その書物がどの位相に位置しているかに注意を払い、検討を加えるべきであろう。即ち「作者(要請者)」―(「書肆」)―「読者(伝授者・享受者)」という構造の上で、書物の内容分析だけではなく、近世社会における書物の背景を考える必要があると思うのである。

さて、近世の女性向け書物を考える上で、重要な位置を占めると思われるものに「女今川」がある。「女今川」は、「最も愛好された女訓書」と評され、『女子用往来刊本総目録』によれば、近世で最も出版数の多い書物である。女子用往来では、「女大学」研究は盛んだが、「女今川」研究は比較的少なく、その成立等を含め、未だ謎の部分が多い書物でもある。

ここでは「女今川」を例に、近世の「女書」の持つ広が

りを検討する。「女今川」は、これまでその本文のみによる解釈により「女訓」「教訓書」「教科書」の語を用いた義づけられてきた。だが、「女今川」は豊富な付載記事を有する書物であり、本文中心の解釈からは、当該書の性格理解が一面的なものになってしまっている。

「女今川」は、また多様な派生作品を有する書物でもあり、「女今川」の取り巻く世界は「女書」の中でも最も広い。具体的には、別種の「女今川」、青本、人情本、春本や双六などの遊戯物、川柳、浮世絵や歌舞伎にまで「女今川」モノは存在する。このように広範な読者及び享受者層を示す史料群の指摘は、女性を取り巻く「知」を考える上で重要である。

「女書」とは、女性に向け書かれた書物全てを、その内容の教訓性といった志向性に関わらず包括する概念と考えている。「女書」として様々な女性向け書物を、その性格付け如何に関わらずあわせて検討することにより、ある一定の時期・身分(作者)・地域(書肆)による女性の「知」の変容に迫ることも可能であろう。また、「女書」と、その類書及び派生作品を含めた諸史料の両者を結びつけて理解できるような広い近世女性史研究の必要性を主張して、本報告の結論としたい。

(本学大学院文学研究科史学専攻博士課程後期課程)